

城県尋常中学校〔現仙台一高の前身〕の初代校長となり、宮城県書籍館長を兼ねた。28年校長を辞し、30年図書館長を退職して東京へ移った。その後は研究著述に専念、特にライフワークだった「言海」の改訂増補に努めつつ、昭和3年2月17日、82才で歿した。東京高輪東禅寺に葬る。「広日本文典」「国語法別記」その他多くの著がある。「言海」を増補拡充した「大言海」本編4冊・索引1冊は、その歿後、昭和7～12年富山房から出版された。

注(5) 幕末の勤王僧。京都清水寺成就院の住職。俗姓は玉井、名は忍鎧また忍介、後に忍向と改め、月照と号した。近衛忠熙〔ただひろ〕・西郷隆盛と結んで大いに尊皇攘夷を唱えたので、幕府の追及急となり、薩摩にのがれ、遂に隆盛と相擁して入水自殺を図った。隆盛は救助され、月照は死亡した。安政5年〔1858〕11月15日、46才であった。

資料 折々のうた（大岡 信）

明治人物逸話辞典下巻（森 銑三編）

復軒旅日記（大槻文彦）

51. 真山青果著「焰の舞」の出版事項

問 真山青果の「焰の舞」についてM館で調べてもらいましたが、遂にわかりませんでした。いつ、どこから出版されたのでしょうか。

答 「焰の舞」は、大正8年〔1919〕真山青果が42才の4月から東京日日新聞に連載した後、同年の12月1日新潮社から出版したものです。⁽¹⁾ 484ページ、四六版で、「真山青果全集」〔全15巻、昭和15～17年、講談社版〕にも、「真山青果全集〔新版〕」〔本編18巻・補巻5巻・別巻2巻、昭和50～53年、講談社版〕にも収録されておらず、現在では容易に入手できない稀書になっています。この長編小説は、明治初年新政府が最重点国策の一つとして、東北開発のため巨額の国費を投入して断行しつつあった野蒜築港が、中途にして一夜の大波に吞まれて壊滅し去ったための、無惨な悲劇をテーマとして綴られたもの⁽²⁾です。政府はこの築港失敗以後、永く東北政策を放棄してしまうという、後進東北全体にとって不幸きわまる結果を招くことになってしまいました。仙台が生んだ文学の巨星真山青果の若き日、明治33年〔1900〕に旧制第二高等学校医学部を中退してから、同36年26才で文壇を志して上京するまでの失意時代は、ベールに包まれてさだかになっておりません。その間石巻郡立病院薬局生、南小泉での開業医代診、私立中学校の国語教師などの職を変えながら、⁽³⁾⁽⁴⁾

仙台周辺を転々としたことが伝えられます。青果自身も「刻舷隨筆」の中で、この時期について詳しく語ることを避け、『落魄〔らくはく〕の極郷里にも身の置きどころなく……』と回想するほど、いいようのない日々を送っていたようです。この在郷期間に、仙台から、うらぶれた思いで田舎町石巻の郡立病院に一時の職を求めて下る道すがら、野蒜の廃墟を自らの脚で踏みしめ、悲風の中に空しく建つ一基の紀功碑をまのあたりにした青果の胸に、鋭く迫った痛烈なものが、もしなかったとするならば、後年この生々しい描写を遂げた作品は生れ出なかったでありましょう。何故ならば、⁽⁵⁾やがて数年後の上京を境に、青果は再び郷里で生活をするをせず、野蒜の地を再訪することなど遂になかったからであります。

注(1) 小説家・戯曲家。本名彬〔あきら〕、明治11年〔1878〕9月1日、仙台区裏五番丁3番地〔現在の十字屋附近の地〕に生れた。旧制第二高等学校医学部を中退、3年程のブランク時代を経て上京、小栗風葉の門に入った。その作風は自然主義に属するものであったが、主観的・情熱的な点でその枠を出るものが多かった。郷土色豊かな小説「南小泉村」〔明治40〕がその先駆をなした作品として最も知られている。なお、その当時、既に「第一人者」(一幕)及び「生れざりしならば」(一幕)の2作を出して、イプセン風の社会劇として相当の世評を呼んだが、その後或る事情により文壇を遠ざかり、松竹合名会社に入り、新派劇の隠れた座附作者として十数年を経過した。亭々生の筆名の新派脚本はすべて彼の作である。大正13年「中央公論」に「玄朴と長英」(一幕)を発表して忽ち劇文壇に復活し、続いて長編「平将門」(二部曲)、「坂本竜馬」その他の戯曲を出して、次第に地歩を進めていった。やがて、先輩岡本綺堂の後を承けて市川左団次のために「頼山陽」「清盛と西光」「乃木將軍」の三部作、「大石最後の一日」「東郷平八郎」「楠公桜井駅」「福沢諭吉」「坂崎出羽守」「元禄忠臣蔵」(増補)の連作等を書き、劇文壇の重鎮として確固たる地位を占めるに至り、芸術院会員に推された。以上の諸作に見られるように、英雄偉人の心境を掘り下げて、動中に静を見ようとする努力の著しい作品が多い。彼はまた、夙に西鶴の研究に苦心し、その副産物として「お夏清十郎」「八百屋お七」「樽屋おせん」等五人の女の戯曲化をも試みた。「西鶴全集」の校訂や「西鶴語彙考証」の著は、「隨筆滝沢馬琴」「仙台方言考」と共に、その研究の成果である。彼の著作をまとめたものに「真山青果全集」全15巻、「真山青果全集〔新版〕」本編18巻・補巻5巻・別巻2巻がある。壮年の戯曲「第一人者」以来、史劇と現代劇との別なく、彼が描くところの性格は、常に一貫して強烈な我意識と深刻な自己解剖に起因する苦悶が、その常に変ることなき主題である。作劇術も精到を極め、殊に新派劇座附作者としての体験から、実際舞台上の知識に富む有数の劇作家であった。最後まで孤高を持した青果は、昭和23年3月25日71才で歿した、東京都文京区水道端町二丁目日輪寺に葬る、法名青果院殿機外文柳大居士。新制作座を主宰する真山美保はその娘である。南小泉村代診時代のゆかりの地、仙台市保

春院前丁4の養種園の中庭に青果の文学碑がある。碑は茨城県産稲田石、底辺横幅2.8m、高1.6m、厚1.1m。碑面には

『羽虫は 何故かは 知らんだらう それでも 飛ばずに るられないのだよ 戯曲

「頼山陽」より』。 碑の裏には

『真山青果先生は本名彬（あきら） 明治十一年九月一日 かつての裏五番丁に寛（東二番丁小九代校長）の長男として生まれる 小説南小泉村により自然主義文学の先駆をなし 戯曲多数を世に送る 昭和二十三年三月二十五日沼津で逝去 七十一才 郷土の生んだ偉大な文学者を顕彰し この碑を建立した 昭和四十八年九月一日 青果碑を建てる 会 河北新報社 劇団新制作座』と刻んである。

- 注(2) 内務卿大久保利通が、明治9年自ら現地視察を行って、東北開発の雄大な構想をたてた。それは安積疏水〔あさかすい〕を以て猪苗代湖と阿武隈川とをつなぎ、更に阿武隈川と北上川とを運河で連結し、その中間に一大港湾を開き、これを運輸交通の大動脈としようとするものであった。港湾地点の選定について、大久保内務卿は安積疏水工事を担当したオランダ人技師ファン・ドールンに命じ実地調査をなさしめた結果、野蒜を最適地であると決定した。わが国に於ける本格的な築港工事は、全く明治に入ってからであり、その近代築港史の第1ページに記されるものが、野蒜築港であったことは、実に驚異すべきことであった。第1位着工野蒜築港から、3位長崎の明治15年、4位横浜の明治22年、6位函館の明治28年、7位新潟の明治29年着工と挙げられるが、いずれもおそいスタートだったのである。それにしても、野蒜築港は、半ば以上外洋に面する全くの新規工事であるため、幾多の障碍が予想され、最初から反対論や批判論が強かった。その計画は、内港と外港とに分けた複雑で特殊なものであった。本工事の着工は明治11年7月であった。鳴瀬川河口を内港、外洋からの風浪を遮断する防波堤の築造、北上運河（野蒜～石巻）・東名運河（野蒜～松島）の開削、新市街の埋立造成など全計画の一部、第一期工事の完成したのが明治14年であった。内港には小船の出入も始まり、近代的な新市街には警察署・電話局・測候所・銀行・米商会所等も建築され、仙台・石巻はもとより東京方面からの進出者もあって、早くも2百戸を超える新興都市となった。そして将来発展の夢と土木景気に湧き立つ活況を呈していた。しかし、取残された外港、即ち宮戸島東北側を外洋船碇泊港とする工事が進まないうち、明治17年秋、突如台風大波に襲われ、突堤の大半が一瞬のうちに根こそぎ決潰してしまった。このため内港への船の出入が阻害され、復旧の見通しは立たず工事は中止とこぎまわった。それまで投入された総額68万3千132円の巨費が、文字通りあえなく水泡に帰ってしまったのである。現場の海中には石塁の残骸が波頭に隠見する有様となり、新市街は火の消えたように廃址と化してしまった。県の事業として実施された真山堀の開削工事も野蒜港との連絡を第一目的として計画されたものであったし、東北線の

路線も仙台以北野蒜経由が当初計画されていた。

注(3) 現在の日赤石巻病院の前身である。明治6年石巻仲町に設立された宮城県立病院石巻分院がその始まりである。同17年宮城県牡鹿郡立病院となり、同22年市町村制実施の際、牡鹿桃生両郡町村組合が組織されその経営に移り、牡鹿桃生両郡公共病院と改称された。同25年に本町に移転。真山青果が一時薬局生となったと伝えられるのはこの後である。大正15年郡制が廃止されるに当って病院経営が困難となったので、日赤宮城支部に病院施設全部を無償寄附することになり、同年10月20日引継を完了し、日本赤十字社宮城支部病院となった。

注(4) 仙台市河原町桑原医院の南小泉出張所。「石岡ダンプ」のモデル松本豊次の持家で、青果はここに泊り込んで代診をしていた。この村の農民の生活をリアルに描いた大傑作が「南小泉村」である。

注(5) 築港工事に尽瘁した内務一等属黒沢敬徳の紀功碑で、鳴瀬川の右岸市街地の一角に明治17年2月建立された。築港が潰滅したのは皮肉にもこの年の秋のことである。

資料 国立国会図書館蔵書目録

真山青果年譜（榮摩書房版「現代日本文学全集」第8巻及び「現代日本文学大系」第21巻の内）

真山青果全集〔新版〕別巻1～2

52. 大石内蔵助の子孫の在仙説

問 大石内蔵助の子孫が仙台にいたらしいということですが、M館で調べても全然わかりませんでした。どうしてもはっきりさせたいので教えてください。

答 記録・文書等でこのことを記したものがありません。語り伝えとしてはなかったこともないようです。そのことについて「伊達家史叢談」第14巻（伊達邦宗）に「大石良雄ノ子孫仙台ニ在リトノ説」として、次のような記事があります。

『大石良雄胸中復讐ニ決スルヤ竊〔ひそか〕ニ其三子ヲ某大藩ニ托シ、其祀ノ絶ヘザランコトヲ欲シ、其一子ヲ大高源吾ノ大堀亮隆〔おおほりすけたか〕ト交リ親シムヲ知り、源吾ヲシテ亮隆ニ図ラシム。亮隆諾シ、事前ニ秘子ヲ仙台ニ送ル。後四人扶持一両ヲ以テ大番士ニ召ダサル。今〔大正10〕土樋ニ在ル大石ハ、即チ其末裔ナリト。大石家法家督相続者以外ニ、之レヲ口外スル事ヲ嚴禁セルヲ以テ、知ル者極メテ寡〔すくな〕シ。就テ之レヲ質〔ただ〕スニ、先祖不明ナルモ二代以後